

RNNReligious NGO Network
On Humanitarian Support
Since 1996世界各地で人道援助に取り組む
宗教NGO、宗教者、信仰者を結ぶ
人道援助宗教NGOネットワーク

RNNニュースレター

そよがぜ

爽やかな風を世界の人々に

発行所

国際貢献・ヒア岡山構想を推進する会内

人道援助宗教委員会

委員長：西村美智雄

広報担当：永宗幸信

事務局

〒701-1212 岡山市尾上神道山2770

TEL / FAX 086-284-1242

アドレス <http://www.rnn-center.org/>

RNN事務局長：黒住宗道

第8回 RNN ボランティア講義



RNNでは、昨年9月11日の米国同時多発テロの報復攻撃を受けたアフガニスタンの難民支援の一環として、去る3月23日、パキスタン北西部に位置するアフガニスタンとの国境の町、ペシャワールに拠点を置き、難民や山岳地帯の無医村の住民に医療支援を続けている「ペシャワール会」現地代表の中村哲医師を講師に迎え、第8回ボランティア講座を開催しました。

開催当時は、報復攻撃によるタリバン政権崩壊後、暫定統治機構が樹立され、東京で復興支援会議が開催されてから間もない時でしたが、中村医師は「カーブル陥落後、世界のメディアは一斉にブルカを脱いだ女性の姿を映し、タリバン政権からすべてが解放されたように伝え、さらに、世界各地からNGOが支援に駆けつけて活動し、東京復興支援会議で、すべてが終わったように伝えていたが、解放されたのは売春の自由、麻薬を作る自由、略奪強盗の自由で、無秩序の状態。タリバン時代の方が百倍ましで、現地は依然厳しい状況」と、マスコミの報道では伝えられない、現地の実情を報告されました。

アフガニスタンは数年前から過去に経験したこと

平成14年3月23日
於：金光町民会館救いの大地 ～アフガニスタン復興への歩み～
ペシャワール会現地代表 中村 哲氏 講演会開催

会場には約300人が来場され、質疑応答では中村医師との活発な意見交換が展開されました。

のない大干ばつに見舞われ、飢餓や水不足のための伝染病が蔓延し、それだけでも大変だったところに、国連制裁が加えられ、さらにテロの報復攻撃に至り、政治とは何ら関係のないところで生活する一般の人々が生命の危機にさらされているとのことでした。

講演後には質疑応答が行われ、イスラム教の救いについての質問や、現地への支援の方法やあり方、日本人ができることは何かなど多岐に渡る質問が場内から発せられ、参加者と中村医師との間で活発な質疑が交わされました。閉会にあたり、RNNと今回の講演会を企画、主催したKPAC金光教平和活動センターから、会場募金分を合わせた総額489万1,744円の支援金を寄託させて頂きました。

『そよがぜ第7号』では、今回の講演録（要旨）を掲載させて頂き、ご協力を頂きました皆さまへの報告に代えさせて頂きます。

（RNN事務局）

そよがぜ
小与加世

梅雨が明け、うる

さく蟬がつきまとう

季節になると思い出

すのがヒロシマであ

る。筆者はある時期

を除いて毎年、ヒロ

シマを訪れている▼

平和とは、戦争がない状態のみ

をいうのではないとする議論が

ある。含みのある深い思考に違

いない▼だが、世界には今まさ

に戦場で傷つき、生命を落と

している多くの人類同胞がおり、

そんな悠長な議論をしている場

合ではないとする立場もまたあ

る。彼らにとっては戦争がない

状態こそが平和なのである▼国

際社会における平和の概念は、

国や民族、宗教の違いやその状

態によって様ではない。一方

の平和は他方の不和の上に成立

する現実を人類の歴史は証明し

ている▼実は前出の議論には続

きがある。記憶は定かではない

が、たしか、一人ひとりの人間

がその人権を保証され、固有の

存在として尊重される人類社会

の成立の上に実現される、とい

った意味合いだったように思う▼

さすれば平和とは、争いや闘い

のない状態と、一人ひとりの心

の平和の上に成立するものとな

るであろうか。いつもヒロシマ

は真夏になつて問いかけてくる。

RNN委員長 西村美智雄

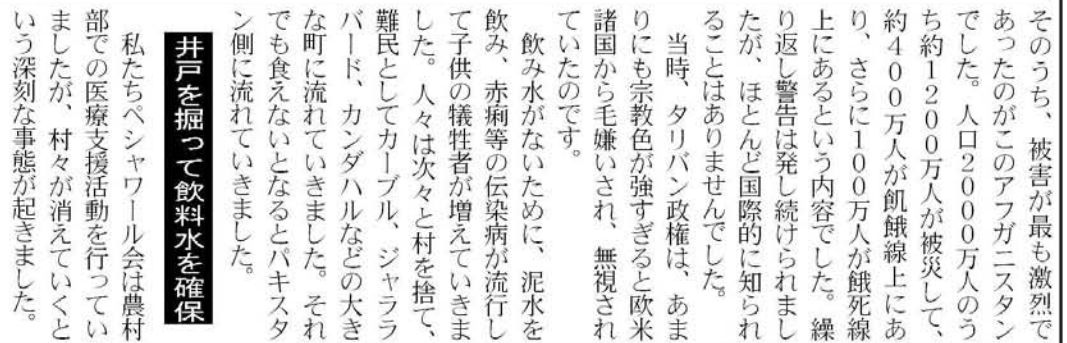
(KPAC事務理事)

ところが、数年前から大干ばつに襲われ、その山の雪が少しづつ消えてきているのです。数万年以上、この乾燥地帯を潤してきた巨大な貯水槽がいま枯れつつあり、飲み水までも無くなるという状態になっているので

す。最も大きなカール川でさえ、歩いて渡れるくらいに、川底が干上がっています。地球温暖化とも関係があります。が、危機的な状態で、私たちとしては戦争よりむしろこっちの方に危機感をもっています。

2000年5月に、WHO

(世界保健機関)とWFP(世界食糧計画)は、ユーラシア大陸のど真ん中に人類が経験したこともないような大干ばつが進行していると警告を発しました。イラン・イラク北部から西はモンゴル、北朝鮮中国に至るまで約6000万人が被災し、



医師がこんなことを言っているのには、いけませんが、当時、私たちが訴えたのは、この際、病氣は後で治せるから、とにかく生きて村に住んでいてくれということでした。そのためにも、飲料水を確保せねばならず、村人を総動員しての井戸掘りを始めました。

私たちは、こんな出来事が世界中で話題にならないはずがない、そのうち救援が殺到するだろうと思っていたら、やってきたのは救援ではなく、国連制裁だったのです。

アメリカ提唱で国連制裁

2000年の1月、アメリカの提唱により、国連はアフガニスタンを制裁しました。タリバン政権が、女性の人権を抑圧しているとの理由でしたが、初めのうちは食べ物まで制裁しようとしたのです。

これによってアフガニスタンの政府関係者だけでなく、政治とは無縁の所に生きている一般の国民を含む国全体が窮地に立たされ、もう後は神に頼るしか

ない、と偶像崇拜の廃除が打ち出され、バーミヤンの石仏が破壊されたのです。その時も100万人の人が飢餓で死んだりしたことはほとんど報道されず、ただ石仏だけが破壊されたとだけ報道されたのです。これによって外国団体がまた続々と引き揚げ、100万都市カールブルが無医地区に近い状態になってしまいました。

米同時テロと報復攻撃へ

私たちの主な活動地域は農村部でしたが、これだけは捨てておけないと、去年の3月に、急速5カ所の診療所をカールブルに開設しました。

そして後は、皆さんが存じのように、ニューヨークのテロと、その報復攻撃となつたのです。100万都市カールブルをあの時期に爆撃すると、どういう事態になるかというのはアフガニスタンをちよつとも知っていたら、想像できたはずですよ。

国連制裁で食べ物もなく、また冬越しができないだろうと、我々は食糧を輸送する「いと

のちの基金」を呼びかけ、食糧配給を始めました。しかし、その後、カープルの陥落による大混乱によって、食糧配給はほとんど挫けております。

一方、農村部での井戸掘りは、東部一帯に展開され、ジャラバードと呼ばれる東ではもつとも大きな町に拠点を置いて、今年2月中旬の時点現在で、700カ所で作業が続けております。空爆下でも休まず続けており、現在確保している水源が600を越えています。

井戸ができる、村を出ようとしていた人が村に留まり、病気が激減するということ、住民たちの喜びにも励まされて、どんどん作業地を拡大していきしました。伝統的な水路のカレーズの復旧も進めています。

ジルガが受け入れたタリバン

「正義」のアメリカに対して、タリバン政権が「悪の権化」のように報道されましたが、実際はそうではないのです。ロシア軍が10万人入ってきてもコントロールできなかった

のに、当初わずか1万5000名の兵力で、あの広大な地域を9割も治められることはないのです。各地域のジルガ（長老）が、これはアフガニスタンにとっていいものだという共通の認識をもち、タリバンの受け入れを決定したのです。

アフガニスタンは珊瑚に例えられます。いろんな民族があつて、各地域がバラバラに生きていく国ですが、アフガニスタンという一つの同一性と、自分がアフガン人だという意識は非常に強いのです。各地域が、どうやってアフガニスタンを受け入れるかという、共通の掟、不文律があり、この不文律を明文化したのがタリバンでした。

タリバン政権が布告した政令のほとんどが、田舎の慣習を明文化したものでした。その田舎の慣習を都市にそのまま適用したことに、問題があつた訳ですが、田舎では普通に守られている法律でした。

ブルカ、教育、女性差別

例えば女性がブルカというか

ブルカ、教育、女性差別

例えば女性がブルカというかぶりものをするという習慣がありますが、これは何百年も前からある習慣で、ベシヤワールやアフガニスタンでも、女性のたしなみとしての一般的な慣習です。タリバンは「アフガン人らしい生活を守れ」と言った訳で、無理矢理かぶれと押しつけたわけではありません。

教育問題についても、識字率を高めるだけが教育ではなく、現地で本当の教育は、宗教教育

であり、農業、牧畜を学んでいくことではないでしょうか。この村にも、マドラサというモスクに付随した学校があり、宗教教育だけではなく、理科や算数も教えています。タリバンは女性がかくれて学校に通うのも黙認し、現地に全然教育がなかった訳ではありません。現在計画されている都市向けの教育が果たしているのでしょうか。

欧米人の物差しでトラブル

特に欧米人にその傾向が強いのですが、よその国から来た外国人が、自分の物差しで現地の習慣、風習を良い悪いだとか、劣っている優れているという目で見ようとして、社会の中で女性に担っている伝統的な役割というのを無視して、よく現地とのトラブルを起こします。

その外国人は、国に帰れば、英雄として迎えられようというが、残された人々をあなたたちが一体どうしてくれるのか、と言いたい気持ちです。

少なくともこの一世紀以上かけて確立されたアフガニスタンというアイデンティティは決して外国人が崩してはいけません。私たちは、現地の文化、習慣についてはとやかく言わず、優秀の物差しで測らない、ということに常に心掛けています。

マスコミはまず肩に唾

マスコミは、まず肩に唾をつけて見る必要があるというのが私の思いです。マスコミの報道というものは、どうしてもみんな

なが納得する筋書きにそって報道されていく傾向が昔からあります。一般に伝えられる現地の情報は、都市部に限られていることをあたかもアフガニスタン全体のもののように伝え、復興が建設的に進んでいるように報道したり、誇張もあり、地域別に居住民族を区別した報道は、海外干渉を招き易いという意味でも危険です。

北部をロシアが援助、アメリカが南部を援助する南北分断、イランが同じシニア派のハジャラを援助するという民族対立に置き換えられていく、第二のユーゴスラビアになりかねない、というのが、私の恐れる最悪のシナリオです。

信頼なき国連、NGO

我々は外国のNGOとは呼ばれたくない、はっきり申し上げます。旧ソ連の侵攻を受けたアフガン戦争以来、NGOは話題性があるとわつと来るが、話題性がなくなると去っていくという事態を彼らは20年以上も見てきたからです。それも日本人、フィリピン人、韓国人などのアジア系の人々を残留部隊にして逃げ帰ったのです。NGOや国連と聞けばせせら笑うほど信用がないのです。

1、2年前のことでしたが、千ばつの最中、何時間も歩いて、バケツ一杯の水を取りに来る人々のいる中で、著名な国際機関が、娯楽用のプールを作っていました。こんな無神経さが、信頼を失う理由です。

かといって、全部が悪い訳ではなく、一生懸命にやっているところは宣伝がへたくそだったります。

一隅を照らす真の国際支援

国際支援と言うとどうしても日本人は騙されやすいのです。が、あちこちを転々とするのが国際的な活動かという、私はそうとは思いません。いろんな国際団体と話していて、ソマリアではどうだった、東チモールではどうだった、バングラディッシュではどうだった、コソボではどうだったと、聞かされるのですが、私は「忙しい人たちが多かつたらうな」と思いました。関わっておいで、自分の都合が悪くなると出ていく、あるいは話題性が無くなると去っていく、こういう団体はマスコミと同じように肩に唾をつけて見なければなりません。

我々ベシヤワール会は、人の行きたがらない場所まで活動することになっています。アフガニスタンのごく一部の地域でごく一部のことをしているだけです。が、あちこちに顔を向けずに、住民たちとの協力態勢を築き、お互いが豊かなものを分かち合っていくことが大切だと思います。これからは「一隅を照らす」精神で、仕事を続けて行きたいと願っております。

タリバン崩壊後の行方

これまで反米感情は、反英感情よりさほど強くなかったのですが、今回の空爆によって非常に強くなっています。

ですが、今回の空爆によって非常に強くなっています。

暫定統治機構のカルザイ議長（現在は大統領）は「アメリカと共にやってきた」と言われています。これは非常に深い意味を持つていて、今後、何かが起こる可能性があるということですが、アフガニスタンでは外国に後押しされた政権というのは存在した試しがなく、マスードもあれだけ欧米に人気がありながら、支持を得られなかったという現実があります。

その理由は、ロシア、アメリカ、フランスの軍事援助を受けていたからでした。アフガン人というのは独立心の強い国民で、とても外国人がコントロールできるどころか、外国人によつて支配されることを非常に嫌う民族です。いままでに色んなところがアフガニスタンを征服しようとして、敵対してきました。

一方、タリバンは、初期を除いて援助を受けておらず、ほとんど自力でやってきた、ということ

ことで人々の信頼を得ることができたのです。

タリバン運動というのは、また、復活するであろうと私は思っています。実際そういう動きもあります。その時に内乱が起るかどうかは別として、アフガン社会のエッセンスのような政権でありましたから、必ず何らかの形で復活するであろうと思われるのです。

たとえカルザイ政権が成功するとしてもかなり時間がかかることでしょう。

日本に好意的なアフガン人

山岳部の農村など大抵の地域の住民は、外国人を見るのが初めてで、もちろん日本人は初めてでした。けれども、日本人です、という、尊敬の眼差しに変わるんです。我々日本人の方は、アフガニスタンをほとんど知りませんけれども、アフガン人の99・99%は日本という国をよく知っています。それも強い親しみを持っているのです。なんで日本がこんなにもてる

のかは、いまだによく分かりませんが、人々が日本について想像するのは、日露戦争と広島、長崎で、大国でありながら、50年以上も戦争が無かったことがすごいという評価のようです。今回の報復攻撃で、幸い知らずに済んだのが、自衛隊派遣のことです。アフガン人の間では、あんな良い日本人が、アメリカに加担するはずがない、騙されているんだということになっていました。これを聞いて、私はもうそれ以上のことは話さないようにしております。日本人であるが故に仕事が見えなかったのは事実で、これは冗談ではなく、ご先祖様の働きだと感謝しております。

アフガンから人類共通の課題へ

今回の講演に招いて頂いて私が一番うれしかったのは、いろいろな宗教を超えて、大切なものに向かって一致して取り組まれているということ、これがいま一番世界で求められているものではないかと思いました。10数年前に旧ソ連軍が侵攻してきたアフガン戦争の時もそうでしたが、今回のこともすぐに忘れ去られてしまうでしょう。しかし、アフガニスタンを通して、見えてきた人類共通の課題に今後、取り組んでいくことができる、それではないのだと思っています。

（文責・編集部）

※尚スライド説明、質疑応答の部分は省略させて頂きました。



講演会の終わりに、ステージで支援金が寄託された。



講演会終了後、スタッフが中村医師を囲んで記念撮影

RNNメンバー紹介シリーズ③ 岡山カトリック教会



岡山カトリック教会（後藤正史主任司祭、岡山市天神町6丁目27）は、建て替えられたばかりで、昨年11月23日に献堂式が執り行われました。新聖堂の名前は「聖ディエゴ喜斎記念聖堂」です。

教会の入口にも石像の建てられている岡山出身で日本二十六聖人殉教者の一人、聖ディエゴ喜斎の遺徳を仰ぎ、「キリストのように考へ、話し、行い、愛し合う教会ー聖ディエゴ喜斎と共にー」との理念から命名されました。

ドーム型の聖堂は、コンクリートの打ち放しの外壁に囲まれた現代風のデザインで、空高く聳える鐘塔からは、美しいカリヨンの音色が奏でられます。

これまでに岡山教会が取り組む大阪西成区釜ヶ崎の「あいりん地区」への毛布支援活動にRNNとして協力させて頂いたり、平成12年5月には、青年部の方々のホストでRNN青年交流会を開催させて頂きました。また、ボランティア講座や、JFC（日比国際児）ミュージカルの会場を引き受けて頂いたり、毎月一度のRNNの定例会ではたびたび会場を提供してもらっています。

RNN発足当時から、副委員長を務めて頂いた服部大介神父が昨年春に広島に転勤、代わりに赴任して来られた後藤神父に後任の副委員長に就任して頂いています。

後藤神父は、韓国、フィリピンでの生活経験のある国際派で、最近、RNNも国際的な活動が増えてきたのでとても頼りになる存在です。

（文責・編集局）

RNNインフォメーション

●金井訓KPAC事務局長がフィリピンへ
金光教平和活動センターの金井訓事務局長が、今秋からフィリピン・マニラのKPAC現地事務所へ派遣されることになりました。

出発される前に、京都に赴任された宮本初代委員長にも参加頂いて、2人の歓送激励会を開催する予定にしております。

●新宗連結成50周年

「新宗連結成50周年岡山県協議会記念集会」が去る3月17日に岡山シンフォニーホールで開催されました。

●加藤登紀子・庄野真代コンサート

7月28日午後6時から岡山市表町の岡山シンフォニーホールで、加藤登紀子さん、庄野真代さんが出演してフィリピンのストリートチルドレンを支援する「FRIENDS・OF・EARTH」コンサートが開催されました。

●海外災害緊急支援募金

RNNではAMDAが緊急支援を開始した場合、災害の募金を実施していますが、今年1月17日夜半、ニラゴンゴ山が噴火して大量の難民が発生したコンゴ民主共和国への募金を呼びかけましたところ、2団体より30,000円が寄せられ、4月25日にAMDAに寄託させて頂きました。

義援金、協賛金等送金用郵便振替口座
加入者名=RNN
01310・9・63933



宗教専門紙『中外日報』5月23日号より

宮本初代委員長が御室派教学部長に

宮本光研初代RNN委員長（真言宗御室派長泉寺住職）が、このほど、御室派の教学部長に就任され、京都の総本山仁和寺に赴任されました。

任期中の4年間は、これまでもRNNに参加頂いていた有瀬光崇師が長泉寺の代務を務められ、RNNの方にも引き続き参加頂くことになっています。本山での活躍をお祈りします。



永宗副委員長から記念品が手渡された。

★田尾さんの門出を祝い鏡を贈呈★

活躍してこられた田尾静子さんが、今春に岡山を離れ、三重県伊勢市に転居されることになり、RNNではこれまでの活動への協力に感謝して、RNNのステートメントと、顔のイラストを彫り込んだ鏡をプレゼントさせて頂きました。

第9回おかやま国際貢献NGOサミット RNNフォーラム開催のお知らせ

テーマ：宗教は平和の担い手となり得るか
9月26日午後2～4時 於：国際交流センターOIC

9月26日～29日に開催される第9回おかやま国際貢献NGOサミットで、26日に「RNNフォーラム」を開催することになりました。

フォーラムでは、米同時多発テロから一年を経て、宗教は平和の担い手になり得るかを問い直すべく、アイルランドのプロテスタント系テロ組織「アルスター義勇軍」UVFに参加していた元テロリストで、現在、兵庫県の西播磨教会の牧師として宣教にあたられているヒュー・ブラウン牧師を講師に招き、講演とパネルディスカッションを開催することにしました。皆様のご来場をお待ちしております。

RNN活動協賛者名

※下記の名称は、協賛者が寺院、教会、団体、個人等の場合でも所属教団、宗派名のみを掲載させて頂きました。

イスラーム	臨済宗	立正佼成会	プロテスタント	天理教	天台宗	創価学会	真言宗	最上稲荷教	金光教	黒住教	カトリック
-------	-----	-------	---------	-----	-----	------	-----	-------	-----	-----	-------